

きわめて簡素平明な標準語の文体と、会話に粒立ってくる九州弁とのコントラストが素晴らしい。

他所者には多分、メルヘンめいた冗語にしか聞こえなくとも、彼にとってそれは、かつて我が地方、我が時の時に、自ら生きた特殊な青春、特殊な領土の、……決して普遍化されえず、他に代替することもできない、生々しい肉の絆を象徴しているのだろう。（『諫早思春記』）

文藝評論家・田中美代子（『図書新聞』）

発売：右文書院 発行◆レック研究所

少年小説集

昭和30年代

発売：右文書院
発行◆レック研究所

最近、私は短篇小説を読んで涙を禁じえなかったことが二度ほどある。そんなことは私にはめったにないことなので、忘れようにも忘れられない。涙は必ずしも人の真情をあかしするものとはいえないだろう。涙を流しながら、自分は愚にもつかぬ感傷に足を取られている、なんて安っぽい涙なんだろうと自己嫌悪をおぼえることも少なくないのである。しかし、私はそのときには、そのような安直さ、自己嫌悪をまったく感じなかった。私が読んでいるうちに思わず涙がこぼれてしまった短篇小説とは、浦野興治の「朋輩」（『諫早少年記』所収）である。

文藝評論家・堀切直人（『じょうほう通』）